

## 戦争の爪痕

オーストリアがヒットラーの率いるナチス・ドイツに統合されたのは今からほぼ五十年前、一九三八年三月のことであった。歴史には血に塗られたページが少なくないが、戦争をめぐる残虐行為は、なにもヨーロッパのみに存在する事ではない。

日中・日韓の關係に未だ氷解せぬしこりが多数残っているのは、周知の事実である。日本の学校で使用される歴史の教科書の中で、これらの国々との戦争と侵略に関する記述、そして政治家の靖国神社参拝の是非についての議論なども毎年のように蒸し返され、日本のマスコミを賑わせる。またオスカー賞を受賞した、中国をテーマにしたベルトルツチ監督の映画「ラスト・エンペラー」が日本で上映されるにあたって、当時の大日本帝国が否定的に描写されている部分は前もってカットされたそうである。その時代を生きのびてきた人々にとって、戦争の記憶と心の傷は癒えることがないのかも知れない。

戦争によって失われたものの価値は、今となっては計り知れぬものばかりである。政治的な思惑や思想上の問題から故郷を捨てざるを得なかったり、直接的・間接的に戦禍の犠牲となった人々の数も数えきれなければ、戦火によって永遠に燃えつきってしまったものも膨大な量となろう。

終戦後の瓦礫の山の中で、民衆は何を感じたのだろうか。戦争が終わった、という喜びとともに「過去の事は忘れたい」という思いは、万人に共通した心情であったに違いない。そのような中で「古いものは捨てさり、新しい未来を築く」気運が生まれたのは、充分に理解できる事だ。

しかしこれによって古いものは更に壊され、捨て去られていくことになる。ひとつの例としてピアノに目を向けてみよう。

ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンをはじめ、ウィーンにゆかりのある作曲家達が皆この楽器のために数多くの作品を残していることからもうかがえるように、ウィーンではピアノが大変に愛されていた。音楽芸術がその栄華を極める十九世紀半ば頃には、ピアノは一般家庭で、そこに食器戸棚があるのと同じような自然さで受け入れられていた。音楽家や音楽愛好家達の「より大きな音、より広い音域、そしてより輝かしい音色を」という要求に答えるために、ウィーンだけでも百以上あったピアノメーカーが互いに競い合い、さまざまな工夫が為されていった。

その中でも楽器の補強材として内部に鉄骨が使用されるようになった事は、ピアノに画期的な進歩をもたらす鍵となった。これによって、より太い弦を強い張力のもとに使用することが可能になり、その結果音が大きく、きらびやかに、そして音域も広くなったのである。

ちなみにモーツァルト時代のピアノでは、弦が一本につき約十五キロの張力で張られているのに対し、それまで一世を風靡していたチェンバロは七キロ、現代のピアノでは平均実に七十五キロもの力で張られている。楽器全体では二十トンあまりの張力である。これに耐えるよう、現代のピアノに使用される鋼鉄製の弦には、一平方ミリメートルあたり百十キロの張力を持ちこたえるだけの品質が要求されている。

それとは別に、ピアノの家具としての美しさも追求され、さまざまな装飾や意匠の施された変わった形の楽器が考案された。場所をとらない縦形ピアノにはより濃厚な家具調メイクアップがなされ、猫足は勿論のこと、本棚と一体になってガラス扉のついているモデル、一見普通の机に見えるが引き出しにあたる場所に鍵盤が隠されているもの等々、楽器としての性能はともかく、そのアイデアには感嘆させられる。

今日でこそピアノの色は黒が普通だが、これは製作費のコストダウンの結果であり、美的感覚の追求によって到達した結論ではない。色や木目の異なる木材をつぎはぎして作ったボディの生地を隠すのに一番効果的で安価、そして修理の際にもむらが目立たない色が、たまたま黒のペンキであっただけの話である。最

近のピアノには化学塗料が使用されるようになり、艶や耐久性が格段に向上した。

しかしその昔愛情を込め、手工技術の粋をつくして作られた、美術工芸品と呼ぶにも値するピアノはどこにいつてしまったのだろう。

それらの多くは、戦時中に冬の寒さをしのぐため真っ先に薪にされてしまったという。薪になる運命を逃れた楽器もついには荷車に積まれ、食糧となる芋や麦と農家で交換された。このような事情と背景があつて、今日でも「なぜこんな所に」と思われるような田舎の農家の納屋や家畜小屋の片隅から、虫に食われ、色あせたピアノがみつかるのである。

古いものは性能が悪くて使い物にならない、新しいライフスタイルに沿って科学的な最新技術によって開発されたものにこそ価値がある、という考えは、戦後かなり長い間一般社会を支配していた。

ハイドンやモーツァルト、ベートーヴェン、シューベルト、そしてショパンが使っていたぐらいまでの古いタイプのピアノをドイツ語で「ハンマーフリューゲル」と呼んでいるが、モーツァルトのピアノ曲をこの楽器で実際に演奏してみよう、などと考える音楽家はつい最近まで皆無に等しかった。これらのピアノは古ぼけた骨董品としてしか扱われず、博物館に展示するならばともかく「楽器としての価値」などは忘れ去られていたのだが、最近改めて見直され、求められるようになった。各地の音楽大学にも古楽器科やハンマーフリューゲル科が新設され、そこで学ぶ学生の数も増えつつある。

専門的な知識や技術を必要とする、歴史の遺産ハンマーフリューゲル修復の専門職人が、ウィーンには幸い「まだ」存在する。それも世界に誇れるレベルのスペシャリストである。しかしかけがえのないノウハウ

を持ちながらも肝腎の楽器が大方失われてしまったのは、運命の悪戯だろうか。

## 調律師

弦楽器のリサイタルやアンサンブル、そしてオーケストラのコンサートなどが開始される前に、聴衆がいるのも全く意に介せず、といった風情でプレイヤーがステージで楽器の音を合わせている。通常はラの音を基本にして全員が音の高さを揃える。弦楽合奏の場合はコンサートマスターの音、オーケストラのように管楽器が使用されている場合にはオーボエの音に合わせるのが、世界共通の習慣だ。ピアノやチェンバロのような鍵盤楽器が入っている場合には、この楽器に全員が合わせる。

鍵盤楽器、特にピアノの音を調律する、という仕事には「調律師」と呼ばれる専門技術を持った人間が必要になる。ピアニストにとって必要不可欠のパートナーであるが、典型的な「縁の下の力持ち」であり、決して表には出てこない。

調律に必要な五十個前後、重さにして七、十キロの道具をアタッシュケースに詰め、例えばピアノリサイタルであればその都度——ということとは、同じホールで毎日リサイタルがあれば連日そのたびに——ピアノを調律・調整する。そして演奏中には万一の場合に備えステージの袖に待機している（のが建前である）。レコーディングのように極端な精密さが要求されるような場合にはつきっきりとなり、必要に応じて休憩ごとに楽器をチェックする。

コンサートホールのピアノ、音楽学校のピアノ、スタジオのピアノ、個人住宅にあるピアノ……と、ピアノの存在する所には必ず出没する黒子のような人である。